

に對し候古樂式正根本にて御座候。名目は古今相違有之候得共、其實異變無御座候。尤三百餘年來式正今様の外、餘情の猿樂躰盛に成り、殊に東山殿義政公専ら猿樂賞翫にて、式正今様御希に成り、猿樂而已繁花に被用、剩へ其名目を蒙り新猿樂も比類の様被稱候。か様の儀、國亂にて禮樂の古式廢亡故名の不正より、朝廷古禮第一の大嘗會絶え、朝家衰微故と見え申候。御家にては御代々結構に被召仕、御嘉禮に被用、聊古樂の本意に立來り候處、右の通改り、殊更御自身御能被遊頃より、御嘉式御能の御作法も改り候様子に御座候。此上如何様に成下り候ても、祖父遺言の限りはいつ迄も堅く守り詰、唯一筋に難有奉存相勤候外は無御座候。乍然右申上候通り、被下置候祿物に猿樂配當米の名目も無御座相勤候。家藝に故實相續仕り、御代々結構に被召仕候處も御座候へば、御扶持人の分は御能大夫・御能役者などは、責て可被稱本意有躰にて御座候。何の道に付ても猿樂と被稱候事、眞實は無理にて御座候。私躰は如何にても成次第に候得共、重き御家御嘉禮に、樂の賤敷は不相應成儀、殊更謠樂雜戲の名目を被用候事は、御嘉禮

の穢の類にても被取用候時は、假に美名を可被稱事に御座候。正敷古式口實遺り候實傳の者に、汚名を被與候は如何成故にて御座候哉。名の不正は、民手足の安堵無之本にて御座有間敷候哉。畢竟禮と樂とにて、人の容儀を正し候事、和漢共實學の上にては知可申候。其時は古樂式正の遺風而已用に立可申候。新猿樂等の淫風雜戲は、神妙に至候共、容儀には妨に成可申候。博識の衆中も、樂の事は先づ器音の煩論而已にて、容儀の事實は疎略に御座候。樂則詔舞と申明文、音律の煩敷く利口にて、萬民の教導難叶事と申證據と奉存候。か様に成下り候ても容儀の事實、正名の大義耳頼りにて御座候。以上。可觀強辯詞二

享保八年三月

一、松平新平の若黨町人を殺害す

御小姓組石川丹後守組、松平新平若黨十六歳平岡忠六と申者、江州屋三郎兵衛と申町人の下人平四郎儀、致慮外及雜言候とて、七月十四日主人新平門下にて切殺候。然處三郎兵衛方より被遂詮議被下候様、町奉行大岡越前守方迄願書出候刻、右願書御用番左近將監迄越前守指出候。依之右死

骸御徒目付見分書並頭丹後守届之書付を以て、遠江守左近將監・壹岐守親候處、對侍町人慮外いたし討留候儀に候へば、御構は有之間敷候。併しか様の類、下手人に成候例は有之間敷候得共、似寄候例も有候哉、例繰候て追て可申上由。就夫奥御祈筆部屋の留繰らせ候處、例不相見得候に付て町奉行の留、又は前方町人を切候儀に付、御目付より見分書を以て町奉行方爲致吟味、二三例も出し候得共、此度の例には難成に付、例書共は御前へ不出候。か様成儀不相見候段、重て左近將監・壹岐守・遠江守を以て申上候處、左の通可申渡由被仰出之。

石川丹後守組松平新平家來

平岡忠六

右忠六儀、酒屋下人平四郎雜言申候とて切殺申候。若輩者の事に候得ば致方も可有之儀候。忠六事年たち候ものに候はゞ、其分には難指置候得共、忠六も若輩者の儀に候間、此度は其通に候。主人より奉公を構、暇可遣候。右書付八月十九日水野壹岐守宅へ、石川丹後守呼渡之。一、竹田權兵衛廣貞の書

今めかしく不及申上候得共、三代の禮樂は戰國の諸侯に陵夷、秦火に亡候得共、其器物も遺風も残り候哉。後漢迄六樂の名も傳候事は、河間獻王の力にて可有御座候。漢高楚聲を好房中の樂、唐山夫人に定り候は漢書に載、武帝の時河間王の古禮古樂は不被用、優倡季延年協律都尉に被補候事は、史記に委敷御座候。後漢迄傳り候六樂も名而已にて、遺風の實聊の事と見え申候。三國以來は禮樂彌散亂亡失仕候儀、又不及申候。隋一統の時文帝禮樂を正し度其議有之候得共、執事の權臣、其身傳來の滄聲俗樂の風を而已舉用ひ、古風傳受の萬寶常の説を塞ぎ候故、恨之家書を燒却して飲食を斷ち、死去仕り候事通鑑に載候。然ば古樂の遺風は、隋の始に地を拂て斷絶仕候事勿論に御座候。唐の時禮樂を正し候得共、大宗眞儒の風無之、軍戰治平の功立候以後、禮樂の儀は殊の外疎略にて、服色も正色を不用、樂も陳・隋の餘風にて、九功七德舞にて相濟候躰、其後尙雅部・胡部差引は立候處、玄宗天寶の時雅俗雜用にて、終に唐朝雅俗の差別二度不分明候由、事物紀原にも載申候。五代之亂尙以と申内王朴と申者出候て、律呂の事は漢京房以來力を